

日本のお城巡り 1人旅 (青春 18 きっぷを利用して)

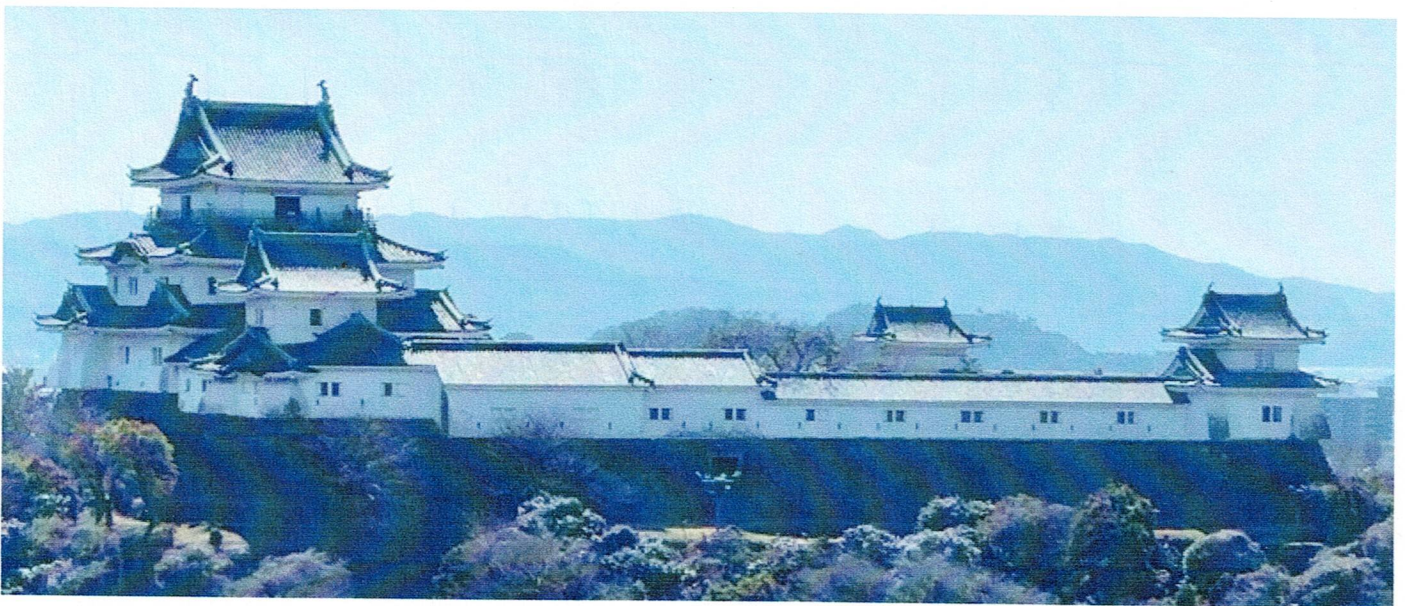
1日目 3月9日 (日) 快晴 和歌山城と岸和田城

行程 JR垂井発 7:00 発→米原 7:46→大阪 9:23 発→和歌山駅 10:55 着→観光交流センター市内バス→市役所 11:50 着→お昼→お城見学終了 13:15 分→タクシーで和歌山市駅(南海電鉄) 14:00→岸和田 14:35→お城見学→岸和田 15:26→新今宮 16:00→大阪 16:30→米原 18:18→垂井 18:48 着

2日目 3月10日 (月) 快晴 明石城と尼崎城と大阪城

行程 JR垂井発 7:00 発→米原 7:29→明石 9:44 着→お城見学→明石 10:51→尼崎 11:25→お昼→市内バス→お城見学→市内バス→尼崎 12:46→大阪 12:54→大阪城公園 13:04→お城見学→大阪城公園 14:37→大阪 15:00→米原 16:30→垂井 16:56 着

I 和歌山城



(市役所の7階の窓から撮影)

① 和歌山城の概略

和歌山城は徳川御三家のひとつで第8代将軍徳川吉宗、第14代将軍徳川家茂を輩出した紀州藩紀州徳川家の居城です。また姫路城、松山城と並んで日本三大連立式平山城のひとつでもあります。現在、本丸と二の丸が和歌山城公園となっており、岡口門と土堀は国の重要文化財に指定されています。また、平成18年(2006年)に復元された御橋廊下は、江戸時代には藩主と側近のものだけが通行できる橋でしたが、いまは自由に通行することができます。虎伏山の西峰に連立式天守が建ち、東峰に本丸御殿があった。山上の御殿は不便で手狭なため、江戸初期以降、藩政と生活の拠点は麓の二の丸に移る。西の丸は藩主が自然風雅を楽しむ場であり、内堀を池に見立てた庭園や能舞台、茶室などが営まれた。南の丸とともに徳川期に新たに造成された砂の丸は、藩の財政を担う勘定所が置かれていた。

城郭構造 梯郭式平山城

天守構造 連立式層塔型3重3階(1605年/1619年築・1850年再 外観復元1958年再)

築城主 豊臣秀長 築城年 1585年(天正13年) 主な改修者 浅野幸長、徳川頼宣

史跡 和歌山城

天正13年(1585)、羽柴(豊臣)秀吉が弟の秀長に命じて岡山(虎伏山)の峰に築城させたのが始まり。築城を担当した家臣の1人がのちに築城の名人といわれる藤堂高虎です。同年、秀長の城代として桑山重晴が入り、秀長家が途絶えると桑山氏が城主となり、豊臣・桑山時代に山嶺部分や岡口の整備が行われました。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦い後、浅野幸長が入城すると、黑板張りの連立式天守を建て、現在の二の丸・西の丸に屋敷を造営し、居城として整備を進めます。大手も岡口から一の橋に変え、大手筋を基軸とする正方位の町割り、城と城下町の形が造られました。

元和5年(1619)、徳川家康の10男頼宣が入城し、55万5千石の御三家の1つ紀州徳川家が成立。二の丸西部・砂の丸・南の丸を増築し、ほぼ現在の和歌山城の姿となりました。明治・大正期を経て、昭和6年(1931)国の史跡に指定され、長く地元で親しまれています。

城のシンボルである連立式天守は、寛政10年(1798)に黑板張りから白壁に外観が一新されますが、弘化3年(1846)に落雷で焼失。その4年後に再建された2代目の天守閣も、昭和20年(1945)に空襲で再び焼失。現在の天守閣は、昭和33年(1958)に鉄筋コンクリート造で再建された3代目です。

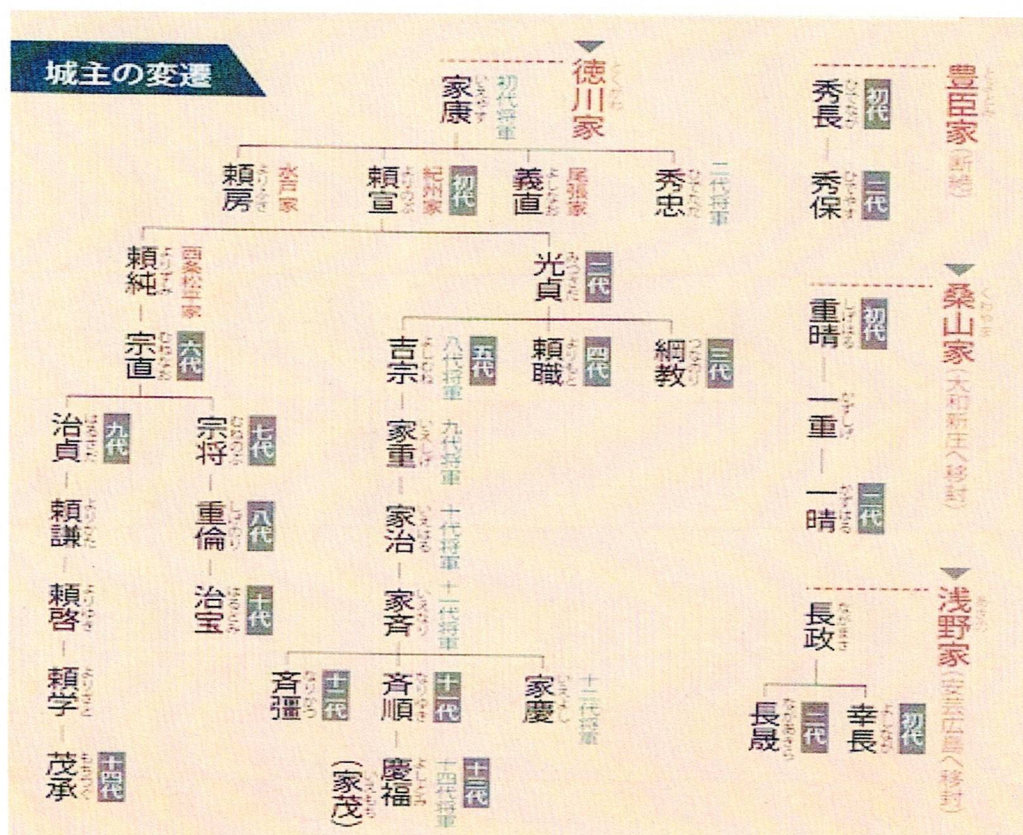
② 天守閣

浅野家が虎伏山の西の峰に、黑板張だが、ほぼ現在と同様の天守閣を築造。三層の大天守から時計回りに多門、天守二之御門(楠門)、二之御門櫓、多門、乾櫓、多門、御台所、小天守へと続く連立式天守だった。寛政10年(1798)十代藩主徳川治宝により白壁の白垂の天守となるが、弘化3年(1846)の落雷で焼失。御三家ということで特別に認められ嘉永3年(1850)にほぼ元のまま再建される。昭和10年(1935)国宝に指定されるが、同20年7月9日の和歌山大空襲で焼失。戦後市民からの要望もあり、昭和33年に空襲前の外観とそのままに、鉄筋コンクリートで復元された。

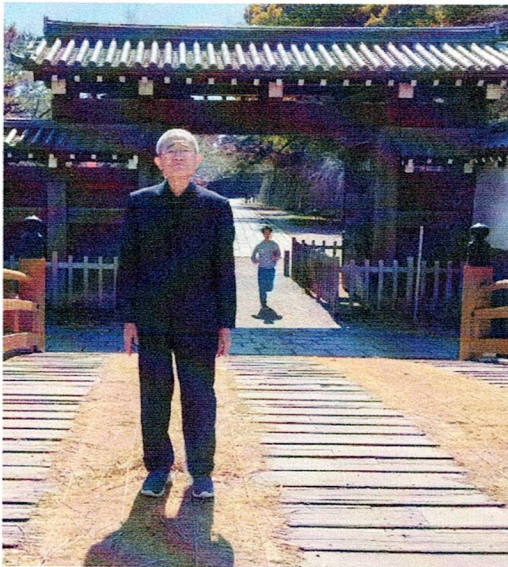
注 史蹟和歌山城 城主の変遷

(パンフレットから)

関ヶ原合戦にとき垂井に陣を構えた浅野幸長が初代城主とは知らなかった。



③ 大手門と一の橋



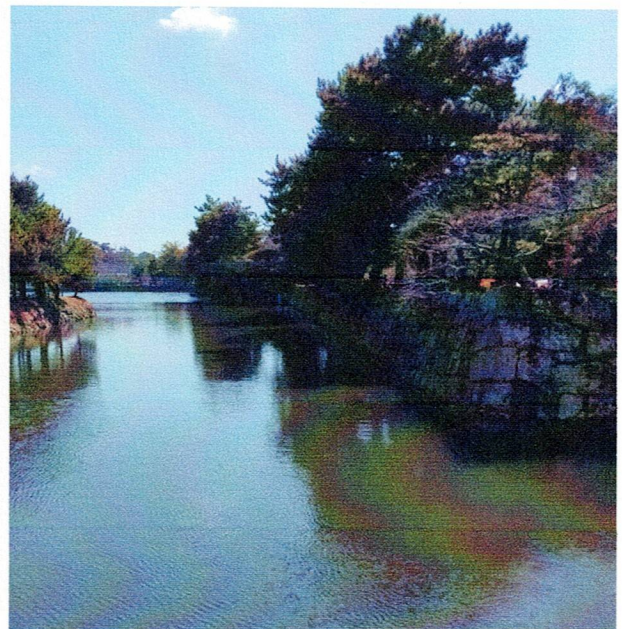
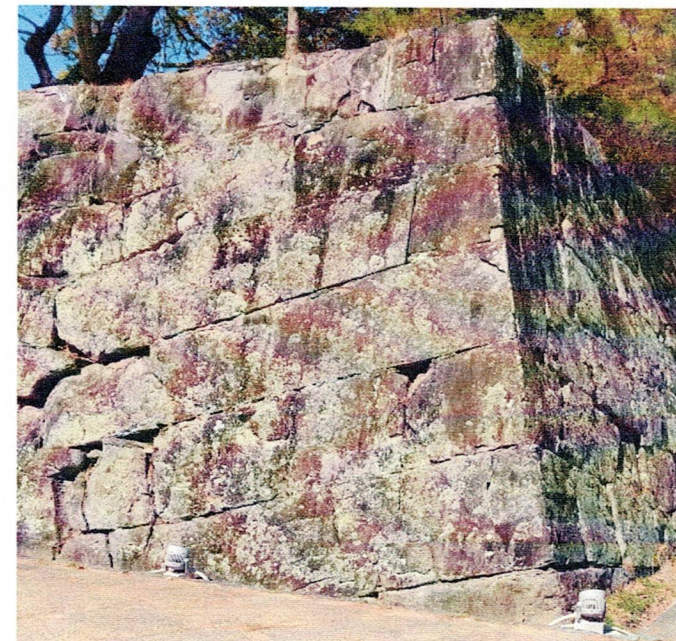
大手門とは城の内郭に入る正面の門。浅野期の途中から大手として機能した。当初は市之橋御門とよばれていたが、寛政8年(1796)に大手門及び一の橋と改称される。明治42年(1909)5月に倒壊するも、昭和57年(1982)3月に再建。翌年3月には一の橋が架けかえられた。

手前の一の橋を渡り、正門である大手門へとつながる。櫓はなく屋根を載せただけの簡素ですっきりとした高句麗門。

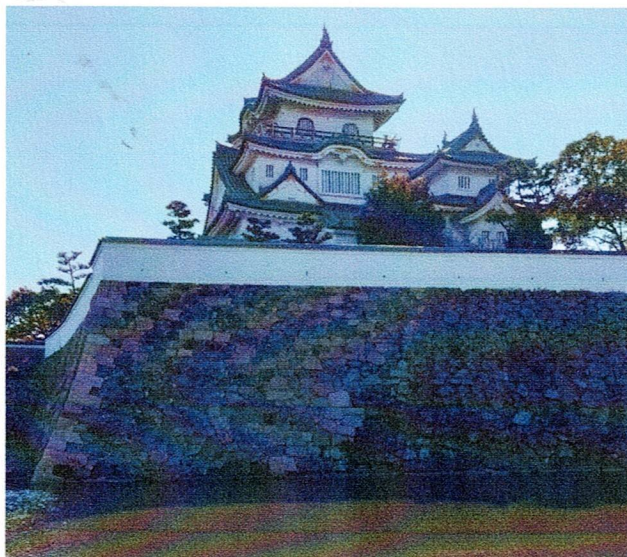
④ 御橋廊下

藩主の趣味の場である西の丸と生活の場である二の丸大奥とをつなぐ廊下橋。殿様とお付の人、奥女中が二の丸と西の丸を行き来するために徳川期にかけられ、風雨を避け、外から姿が見えないように屋根と壁を設けている。兩岸の高低差のため斜めにかかる全国的にも珍しい橋で、滑らないように廊下の床板を鋸歯状に組んでいる。江戸時代の図面を基に平成18年(2006)復元。

石垣とお堀

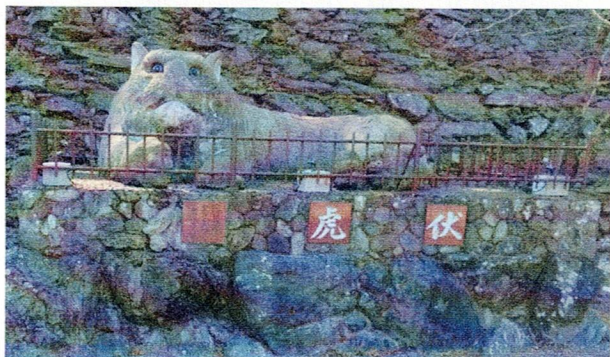


大楠
県指定天然記念物



高石垣と櫓

1585年（天正13）に羽柴秀吉が弟の秀長に命じて岡山（虎伏山）の峰に築城させたのが始まり。築城を担当した家臣のひとりがのちに築城の名人といわれる高虎です。高虎らは普請奉行として本丸・二の丸を年内に築いた。同年、秀長の城代として桑山重春が入り、秀長家が途絶えると桑山氏が城主となる。



別名 虎伏城、竹垣城

和歌山観光交流センターで日本三大水攻め乃戦い 紀伊雑賀惣国 太田城を知る

雑賀惣国宮郷 太田城

太田城史跡顕彰保存会

天正十三年（一五八五）四月二十二日、羽柴秀吉軍十万の兵に囲まれ紀州攻めの最後の砦となった太田城は、五千人が籠城すること約一カ月、ついに刀折れ矢尽き、城中の子女等の助命を願って城将・太田左近宗正をはじめ五三名が自刃し開城しました。

戦国時代の和歌山市周辺は、「雑賀（さいか）」と呼ばれ「惣国（国一揆）」といわれる宗教勢力を背景とした土豪・地侍の連合による地域自治が行われていました。

太田城は、雑賀惣国の宮郷（社家郷）に、日前国懸神宮の神領保護のため延徳三年（一四九二）六四代国造・紀 俊連が築城し、天正四年（一五七六）太田村郷士・太田源三太夫がより強固な構えに修築したといわれています。

太田城は、現在のJR和歌山駅東口の東南約四百メートルに位置する

来迎寺、玄通寺を本丸として、南北三五〇メートル、東西三〇〇メートルの不整形の平城で、幅一〇メートル、水深五メートルの堀をめぐらし、六〇メートルに櫓を設けていました。特に、岡山県高松城、埼玉県忍城と並び日本三大水攻めの戦いのあったことで知られており、さらに刀狩令の原型が実施されるなど、中世から近世への激流の渦中にあった城でした。

秀吉軍の水攻めの規模は、築かれた堤の総延長七キロメートル、高さ四メートル、堤底の幅三四メートルで、延べ四七万人の労力で、わずか六日間ですべて完成しました。現在、二カ所にこの堤跡が残っています。

また、太田城は、開城と同時に焼失しましたが、唯一の遺構として大門が和歌山市橋向丁の大立寺山門として永遠の太平の世を祈るかのようになんかに佇んでいます。

II 岸和田城 (頂いたパンフレットから)

伝承では、建武新政期に楠木正成(楠正成)の一族、和田高家が築いたといわれています。

天正13(1585)年、羽柴秀吉は紀州根来寺岸和田城の写真討滅後、叔父小出秀政を城主とし、秀政によって城郭整備され、天守閣もこの時に築られました。小出秀政・吉政・吉英、松平(松井)康重・康映をへて寛永17(1640)年、岡部宣勝が入城(6万石、のち5万3千石)。以後、明治維新まで岡部氏13代が岸和田藩を統治しました。

天守閣は文政10(1827)年に落雷で焼失、維新时期には櫓・門など城郭施設を自ら破壊したため、近世以前の構造物は堀と石垣以外には残存していません。

現天守閣は、昭和29年に建造された3層3階の天守です。本来は5層天守であったことが絵図などで確認されています。城跡は昭和18年に大阪府指定史跡となりました。

岸和田城の概要

岸和田古城の築城時期は不明ですが、南北朝の時代より岸和田を治めていたとされる岸和田氏が築いたと考えられています。戦国時代になると、細川氏や三好長慶の元で松浦守が台頭し、現在の城地に新たに築かれたようです。その後、織田信長～豊臣秀吉～徳川の時代と移りゆく過程で、今に繋がる城の姿が形作られていきました。

岸和田城は、昭和の天守閣や庭園以外にも、本丸・二の丸の石垣や水堀、城下町の面影が残されています。和泉国唯一の近世城郭として貴重な歴史遺産です。

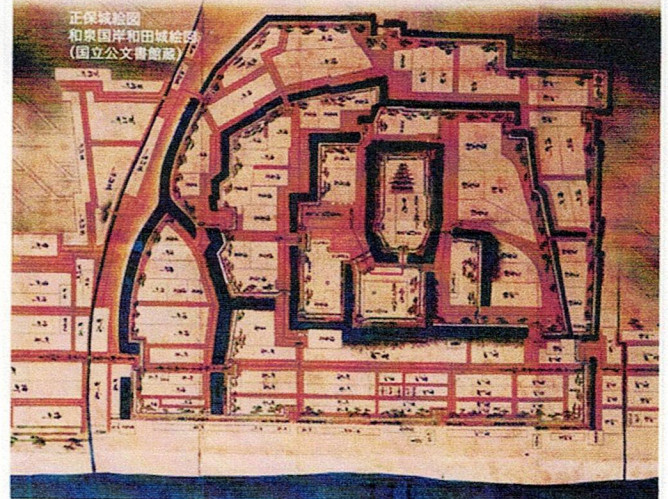


岸和田城天守閣

岸和田城は、五層の天守が江戸時代に落雷で焼失してからは天守のない城でした。1954(昭和29)年、市民と旧城主・岡部氏の要望で、図書館として復興されました。小天守を伴う三層の天守閣で、近代の名建築家・池田谷久吉氏の設計です。最上階は高欄が巡る展望台で、その眺めは岸和田城庭園を俯瞰で捉え、遠くは明石海峡大橋まで望むことができます。1976(昭和51)年、1階2階は郷土資料の展示室となりました。1992(平成4)年に大改修が行われました。

岸和田城年表

- 1583(天正11)年 羽柴秀吉、根来・雑賀ら紀州勢の押えに、中村一氏を岸和田城主とする。
- 1584(天正12)年 岸和田城は、紀州勢の攻撃を受けるも撃退する。(後世、蛸地藏の伝説に)
- 1585(天正13)年 秀吉、紀州攻めの指揮に岸和田城入城。紀州平定後は小出秀政が城主となる。
- 1587(天正15)年 秀政、岸和田城の大改修に着手する。
- 1598(慶長3)年 この頃までには五層天守が完成か。
- 1615(慶長20)年 大坂夏の陣、豊臣方が岸和田城を攻撃するが、城方が固守する。
- 1619(元和5)年 徳川の世となり、松平康重が入封。外郭・防潮石垣・城下町・紀州街道を整備。
- 1623(元和9)年 伏見城より伏見櫓が移築される。
- 1640(寛永17)年 岸和田城は徳川氏再築大坂城を守る重要拠点となり、岡部宣勝が入封、岡部氏13代が岸和田藩を治める。
- 1827(文政10)年 天守が落雷のため焼失。
- 1869(明治2)年 版籍奉還。岡部長職が岸和田藩知事に。
- 1871(明治4)年 廃藩置県。城の建物が解体される。
- 1943(昭和18)年 岸和田城跡が大阪府史跡に指定。
- 1953(昭和28)年 本丸に岸和田城庭園(八陣の庭)が作庭される。
- 1954(昭和29)年 三層の天守閣が復興される。
- 1969(昭和44)年 櫓門・多聞櫓・隅櫓が復興される。
- 2014(平成26)年 岸和田城庭園(八陣の庭)が国名勝に指定。





別名 岸ノ和田城、膝城、蟄亀利城、千亀利城
 城郭構造 輪郭式平城
 天守構造 複合式望楼型 5重5階（慶長二年、1597年築）
 複合式層塔型 5重5階（元和五年、1619年改）
 現在：連結式望楼型 3重3階、復興天守（昭和29年、1954年再）
 築城主 信濃泰義か
 築城年 応永年間（1394年-1428年）
 主な改修者 三好実休、小出秀政、岡部宣勝
 主な城主 小出氏、岡部氏、三好氏



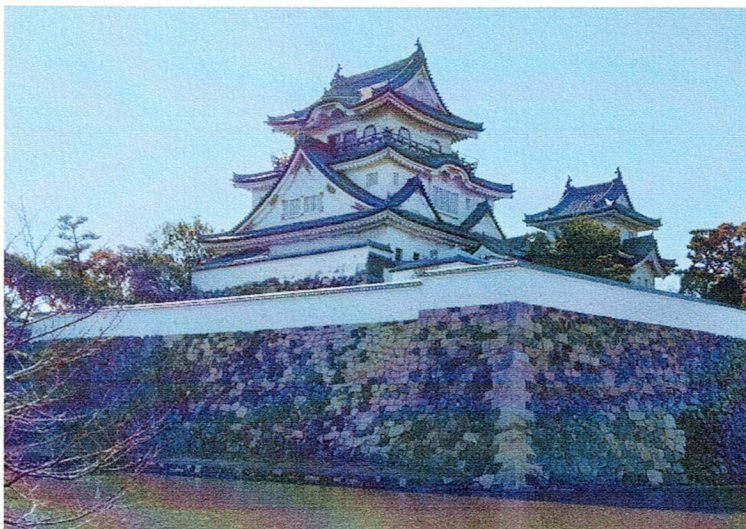
岸和田城の石垣は、長い歴史の中で改修と修復を重ねてきた。打込接・切込接の石垣、算木積みみの隅石垣、巻き石垣など、時代によって異なるバラエティに富んだ技法の石垣を見ることができる。石材は和泉砂岩を中心に、花崗岩も使われている。

写真は櫓門と本丸の東面と南面の石垣の裾には犬走り（水はばき石垣）がある珍しい遺構がある。

<コラム：戸田氏鉄>

慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いに従軍した。慶長8年（1603年）、父の一西の死により家督を継ぎ、近江国膳所藩主となった。大坂の陣では居城の膳所城の守備に徹することを命ぜられ、戦後の元和元年（1615年）に摂津尼崎5万石へ移封された。元和3年（1617年）7月16日、従四位下に昇叙。采女正如元。寛永12年（1635年）7月28日、美濃国大垣10万石へ移封された。

<注 尼崎城の余白がないため>



Ⅲ 明石城

① 城の歴史（駅近くのあかし案内所で頂いたパンフレットから）

元和三年（1617）、小笠原忠政（のち忠真）が信濃松本より明石に国替えとなり、現在の明石城より南西約1km程の所にあった船上城に入ったことから明石藩が生まれた。

現在の明石城は、元和四年（1618）徳川二代将軍秀忠が、西国諸藩に対する備えとして、藩主小笠原忠政に新城の築城を命じたことに始まる。秀忠は姫路城主であった本多忠政の指導を受けるよう命じ、3カ所の築城候補地をあげ、現在の地が選ばれた。幕府は普請費用として銀巻千貫目を与え、3名の普請奉行を派遣している。

石垣の普請（＝現在の土木工事）は元和五年（1619）の正月に始められ、工事は町人請負で行われたとされる。本丸、二ノ丸等の城郭中心の石垣、三ノ丸の石垣、土塁及び周辺の堀の普請が同年八月中旬に終わり、幕府より派遣の普請奉行はその任を終え江戸へ帰参している。幕府直営工事は本丸、二ノ丸、三ノ丸までで、その他の郭の石垣・土塁工事は幕府と小笠原氏の共同工事で行われている。

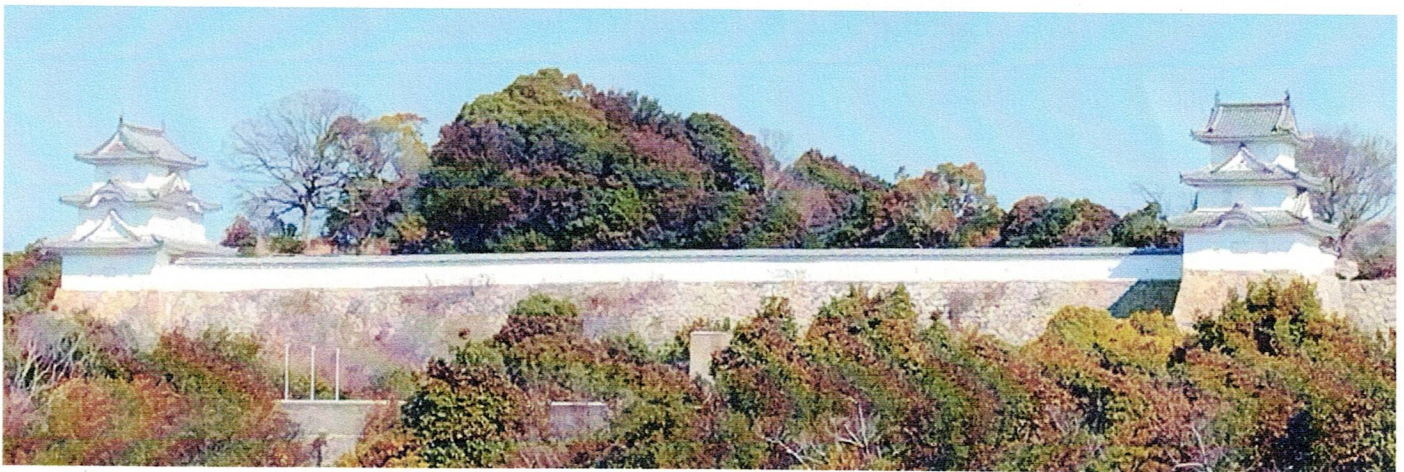
普請を終え、同年九月から藩主小笠原忠政により櫓、御殿、城門、塀などの作事（＝現在の建築工事）が始められ、その用材は幕府の一国一城令により廃城となった伏見城及び自領内の三木城などの資材を用いて建てたとされている。創建当初の坤櫓については次の史料があり、伏見城の建物を幕府からもらい受け、移築されたことを示している。

「坤ノ櫓ハ伏見御城ノ櫓ナリシヲ此度公儀ヨリ公エ下サレコレヲ建ル」『小笠原忠真年譜』

「幕府から伏見御城の三重櫓一つ下され、御本丸末申の角に立候也」『笠系大成附録』

各建物の建築は翌元和六年（1620）四月に完了した。

築城当時の明石城は、本丸に御殿を築き、四隅に三重の櫓を配したが、天守台の石垣は築かれたものの、天守は建てられなかった。



明石を見守り続ける「巽櫓（たつみやぐら）」と「坤櫓（ひつじさるやぐら）」。約400年前の築城当時から残り、まさに”時のまち・明石”を象徴する存在です。全国に12基しか存在しない現存三重櫓のうちの、貴重な2基であり、国重要文化財に指定されています。

櫓の名は方位を表し、坤（ひつじさる）は本丸の南西・巽（たつみ）は南東にあることに由来します。

天守は建てられませんでした。長さ380m、高さ20m超の石垣の上に築かれた本丸四隅の三重櫓は、勇壮を誇りました。城域も当時のままに保全されています。

別名 喜春城、錦江城 城郭構造 連郭梯郭混合式平山城
 天守構造 なし(天守台はあり) 築城主 小笠原忠真 築城年 1618年(元和4年)
 主な改修者 松平直常 主な城主 松平氏(越前系) 廃城年 1874年(明治7年)
 遺構 櫓、石垣、堀、移築門 指定文化財 国の重要文化財(巽櫓・坤櫓)、国の史跡

歴代城主(パンフレットから)

代	氏名	官名	禄高	在任	入封年月日と前任地	
1	小笠原忠真	右近大夫	10万石	16年	1617年	元和3年7月 信濃松本
—	本多忠義	能登守	幕府直轄	6ヵ月	—	
—	本多政勝	内記				
2	松平康直	丹波守	7万石	1年	1633年	寛永10年5月 信濃松本
3	松平光重	丹波守	同	5年	1634年	寛永11年5月 家督相続
4	大久保季任	加賀守	同	11年	1639年	寛永16年3月 美濃加納
5	松平忠国	山城守	同	11年	1649年	慶安2年7月 丹波篠山
6	松平信之	日向守	6万5千石	21年	1659年	万治2年2月 家督相続
7	本多政利	出雲守	6万石	4年	1679年	延宝7年10月 大和郡山
8	松平直明	若狭守	同	20年	1682年	天和2年3月 越前大野
9	松平直常	但馬守	同	43年	1701年	元禄14年10月 家督相続
10	松平直純	左兵衛督	同	21年	1743年	寛保3年2月 同
11	松平直泰	左兵衛督	同	21年	1764年	明和元年5月 同
12	松平直之	左兵衛佐	同	2年	1784年	天明4年10月 同
13	松平直周	左兵衛督	同	30年	1786年	天明6年6月 同
14	松平(直)齊部	左兵衛督	同	25年	1816年	文化13年9月 同
15	松平 齊宣	兵部大輔	8万石	4年	1840年	天保11年2月 同
16	松平 慶憲	兵部大輔	同	26年	1844年	天保15年7月 同
17	松平 直致	左兵衛督	同	5ヵ月	1859年	明治2年2月 同
		明石藩知事			1859年	明治2年6月 任命

苦心して明石城を築城した小笠原忠真は、1632年(寛永9年)豊前小倉藩(小倉城)に転封となった。翌1633年(寛永10年)信濃松本藩より松平庸直(戸田氏)が7万石で入城したが、急死したため松平光重が城主となった。しかしその松平光重も1639年(寛永16年)美濃加納藩(加納城)に転封となると、大久保忠職が7万石で入城したが、1649年(慶安2年)までのわずか10年間で肥前唐津藩(唐津城)に転封する。

その後、丹波篠山藩より松平忠国が7万石で入城、その子・松平信之と共に名君として知られ、林崎掘割の用水路や一里塚の設置、海岸の防風林の造成、そ

して多くの新田の開発に努めた。文化人でもあったらしく城内十景を選んでこの時に「喜春城」の名を付けた。しかしその松平信之も、1679年(延宝7年)大和郡山藩(郡山城(大和国))に転封となると、代わりに郡山城にいた本多政利が6万石で入城する。しかし、領内を収める事ができず1682年(天和2年)僅か3年後、苛政を責められ陸奥岩瀬藩に1万石に減知転封となり、その後改易になった。僅か50年の間に城主が目まぐるしく入れ替わったが、本多氏転封の後、越前家の松平直明が6万石で入城し、以後明治維新まで10代、189年間親藩として松平氏の居城となった。各城の遺材を集めて築城したせいも、老朽化が早く第2代藩主松平直常の1739年(元文4年)には大修築が行われた。最後の明石城主は松平直致で、1874年(明治7年)廃城令により廃城となる。

巽櫓(たつみ) 右側

本丸の南東端に築かれた3重櫓で、船上城から移築されたと伝わっています(船上城の天守だった可能性も)。ただし1628年(寛永5年)または1631年(寛永8年)に焼失したため、現在ある櫓は再建されたものです。櫓の大きさは、桁行五間(9.03m)、梁間四間(7.88m)、高さ七間一寸(12.53m)、240トンで、各階の高さは3m弱となっています。阪神淡路大震災後は曳家工法を使って修復されました。

坤櫓（ひっじさる）左側



伏見城から移築されたと伝わる、城内で最大規模の3重櫓です。天守が築かれなかった明石城では天守代用として使われました。櫓の大きさは、桁行六間（10.94m）、梁間五間（9.15m）、高さ七間二尺九寸（13.28m）、340トンで、各階の高さは3m強で、異櫓よりひと回り大きくなっています。内部には、伏見城の部材と思われる木目のそろった松材が多く使われています。

坤櫓の石垣

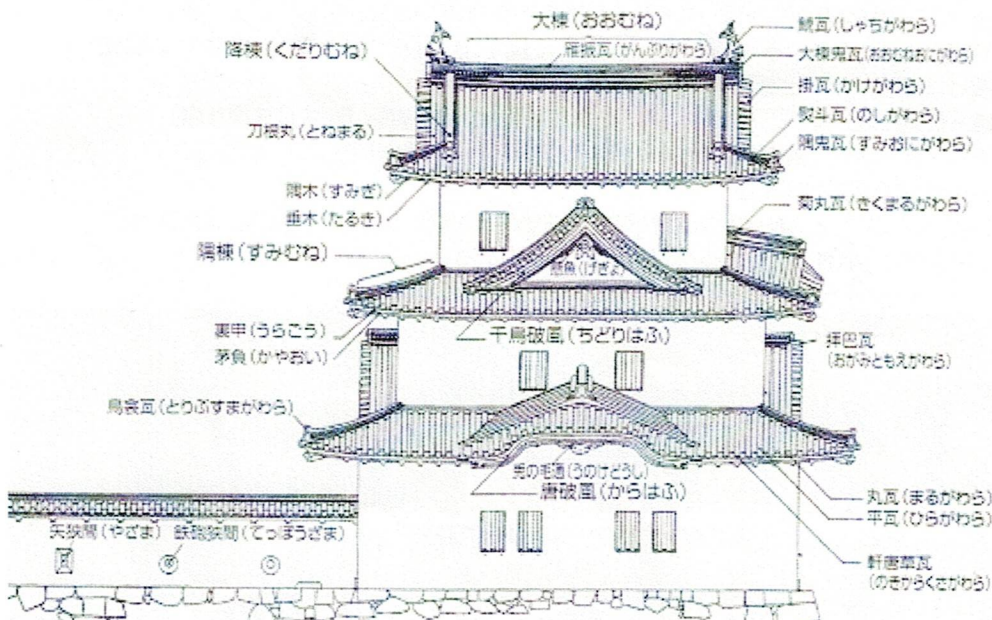
明石城の高石垣は東西の幅が380m、三の丸からの高さが約20m（帯郭までが約5m、そこから約15m）の規模を誇ります。なお幕府が当初築いた部分は主に花崗岩、明石藩がのちに補強

修復した部分は主に凝灰岩（竜山石）が使われていて、石垣の時期差を見ることができます。また、櫓台の出角部分はノミで稜線を尖らせる「江戸切」という手法が多く用いられ、石垣全体の美しさを際立たせています。算木積み部分は角をノミで尖らせる江戸切が多用されています。

算木積み

石垣の出角部分（隅石）の積み方で、日本の築城技術が一気に飛躍した1605年（慶長10年）後に用いられて以降、城郭の石垣のスタンダードになりました。長方体の石の長辺と短辺を交互に重ね合わせることで強度を増しています。名前の由来となった「算木」とは、和算に使う道具で、易学の道具としても使われています。

建築装飾



IV 尼崎城 <月曜日だったので休館日：残念>



別名 琴浦城、琴城、尼丘城 城郭構造 平城
天守構造 複合式層塔型 4重4階 (1618年 非
現存・2018年 模擬)

築城主 戸田氏鉄 築城年元和3年 (1617年)

主な改修者 青山氏でほぼ完成

主な城主 戸田氏鉄、青山氏、松平忠喬

廃城年 明治6年 (1873年)

国の史跡大坂夏の陣後、江戸幕府は大坂を直轄地として西国支配の拠点とするため、元和3(1617)年、譜代大名の戸田氏鉄(うじかね)に尼崎城を築城させ、大坂の西の守りとした。

尼崎城は、翌元和4(1618)年から数年の歳月をかけて築造されました。3重の堀と4層の天守からなる城で、その規模は、現在の北城内・南城内の約300メートル四方、広大なものでした。

幕府は一国一城令により、各地の城郭を破却する政策を推し進める一方で、尼崎には5万石の大名

の居城としては大きすぎる城を造らせている。幕府がいかに尼崎を重要視していたかが分かる。

尼崎城は、戸田氏・青山氏・(櫻井)松平氏と、代々譜代大名が藩主を務める尼崎藩政の中心として、また、城下町尼崎のシンボルとして、約250年もの間、威容を誇った。その長い年月の間には、修復工事を常に行い、城を保つ努力が繰り返し行われていたことがわかっている。

各地の城の天守が倒壊、消失する中、尼崎城天守が江戸時代を通して変わらぬ姿であり続けたことは、奇跡的でもある。

尼崎城の天守は、4層4階の大天守に、西側の2階建て多聞櫓の小天守が付属する複合式天守と呼ばれる形式でした。約12メートルの天守台石垣の上に、約18メートルの高さでそびえる層塔式の大天守は、唐破風・千鳥破風の屋根飾りをつけるなど装飾的な意匠が凝らされ、シンプルながらも堂々とした美しい外観を持つ、尼崎のシンボリック的存在でした。

徳川家康の厚い信頼を得た戸田氏

重要拠点であった尼崎には最初から優れた人材が配されました。尼崎城築城は初代藩主・戸田氏鉄(うじかね)によるものです。近江国膳所や、尼崎での築城の実績を認められた戸田氏鉄は、大坂城の普請総奉行となって活躍した。

優れた政治的手腕をもった青山氏

初代・幸成(よしなり)から四代、尼崎藩主を務めたのが青山氏です。幸成は元服時から2代目將軍・徳川秀忠の小姓を務め、秀忠が將軍の時代には後代の老中の役を務める幕府の高官でした。尼崎に来たのは、3代目將軍・家光の時代になってからです。

徳川氏の分家のひとつ松平氏(櫻井松平氏)

尼崎藩主となった松平氏は、徳川將軍家の多数ある分家のひとつで、櫻井松平と称されている。戦国時代以来の徳川家の家臣である大名達と同じく、譜代大名に格付けされています。初代の忠喬(ただたか)から七代にわたって明治の廃藩まで尼崎藩主を務めた。

注 以上。尼崎城公式HPから

v 大阪城



別名 錦城/金城

大坂城/大阪城

城郭構造 輪郭式平城

天守構造 複合式もしくは連結式望楼型 5重6階地下2階 (1585年築)

独立式層塔型 5重5階地下1階 (1626年築) いずれも非現存

独立式望楼型 5重8階 (1931年復興・SRC造)

築城主 豊臣秀吉

築城年 1583年 (天正11年)

主な改修者 徳川秀忠 主な城主 豊臣氏、奥平氏、徳川氏

廃城年 1868年 (明治元年)

遺構 櫓、門、石垣、堀 指定文化財 国の重要文化財 (櫓・門など)

特別史跡 登録文化財 国の登録有形文化財 (復興模擬天守)

再建造物 復興天守

石山本願寺の時代

浄土真宗本願寺8世の蓮如上人れんにょしょうにんが明応5年(1496)、いまの大阪城地に坊舎を建立。やがて本山の本願寺がここに移され、「摂州第一の名城」と称されるほどの要害を誇った。一向一揆の本拠として、織田信長と足かけ11年にわたって抗争。天正8年(1580)の講和条件により、本願寺は寺地を信長に明け渡す。そのさい堂舎と寺内町は炎上した。

豊臣大坂城の栄華

本能寺の変の翌年、天正11年(1583)に羽柴(豊臣)秀吉が大坂の地に築城を開始。天下統一の拠点とした。壮麗な大城郭は人々の目を奪い、「三国無双」、「日本中で最大で最強」などと評された。城下町も建設されて繁栄をみた。しかし秀吉没後、国政の実権をにぎった徳川家康に攻められ、慶長20年(1615)の大坂夏の陣で落城。豊臣家も滅亡した。

徳川幕府による再築

大坂城は2代将軍徳川秀忠の命により、元和6年(1620)から10年の歳月をかけて再築された。64家の大名が動員されて石垣もすべて新しく築きなおされ、豊臣大坂城は地中に埋められた。寛文5年(1665)に天守を落雷で失ったが、徳川大坂城は幕府の西日本支配の拠点として大きな役割を果たした。明治維新のさい、戊辰戦争ぼしんで主要な建造物のほとんどが焼失した。

昭和の天守閣復興

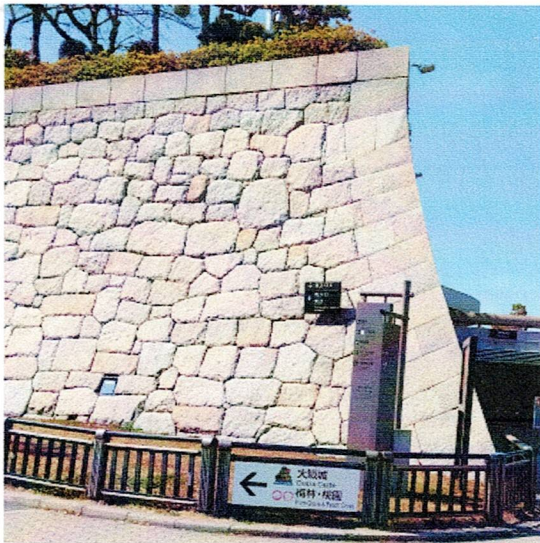
明治維新後、大坂城跡は陸軍用地として使われた。そのなかであって昭和6年(1931)、市民の熱意によって現在の天守閣が復興され、平成9年(1997)には国の登録有形文化財となった。大阪城一帯は第2次世界大戦の空襲で大きな損害をこうむったが、戦後は緑ゆたかな史跡公園として整備された。

織田信長に抗していた石山本願寺の跡地を手に入れた豊臣秀吉は、全国統一の本拠地をこの地大阪と定め、天正11年(1583)、雄大極まりない大阪城の建築に着手した。完成に約15年を要したその規模は現在の4~5倍という広大なものであり、本丸中央には金色に輝く天守がそびえていた。

しかし、元和元年(1615)、大阪夏の陣で豊臣家滅亡とともに大阪城はすべて焼失してしまった。江戸時代に入って元和6年(1620)、徳川幕府は大阪城の再建にのり出した。10年の歳月と幕府の威信をかけて再建された大阪城は、全域にわたる大規模な盛土と石垣の積み上げ、堀の掘り下げが行われ、天守閣も15m高くなるなど、豊臣秀吉が建築したものとは全く異なったものとなった。

しかし、この天守閣も寛文5年(1665)の落雷で焼失したまま再建されず、その他の建物も、大手門や多聞櫓などの一部を残して明治維新(1868)の動乱で焼失してしまった。

昭和6年(1931)、当時の市長関一(せきはじめ)の提案と市民の募金により天守閣の再建が行われた。太平洋戦争の空襲によりいくつかの建物が焼失し、天守閣も各所で破損したが、戦後の全域の公園化と、昭和33年から41年にかけて行われた櫓・蔵などの修復、そして昭和6年当時の天守閣の姿をよみがえらせるために平成9年に行われた「平成の大改修」により今日みられるような姿となったのである。



J R大阪環状線にて大阪城公園駅下車

右手に太陽の広場や大阪城ホールを見ながら天守閣に向かう。途中にある強大な石垣を通り、東外堀の青屋門を渡り、内堀にかかる極楽橋を渡り、大勢の外国人がいた天守閣のある場所へ行けた。で、驚いたのは入城料 600 円を買うのに長蛇の列で、15 分待ちと掲示板があった。一時入城を止めようとしたが、御城印が天守閣の入り口での販売と聞き、並び始める。

御城印を購入後、5 階までのエレベーターがあり再び並び始める。上の階までは階段で登ることになる。

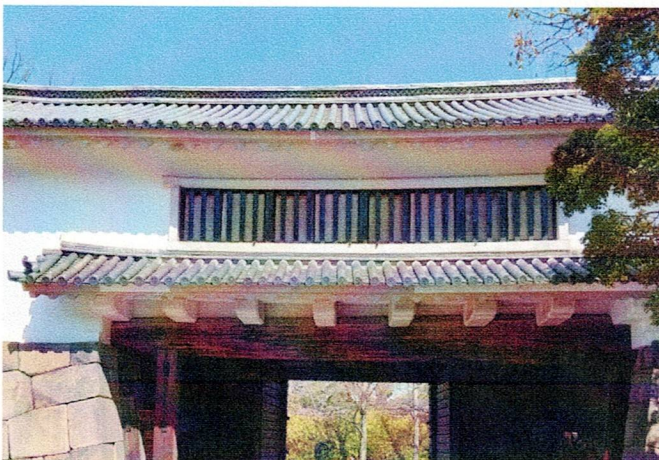
最上階からの眺めで金の鯨を発見。

返り道で、高石垣にそびえる天守を撮影する。

最後に、列車の時間を気にしながら見学だったので多くの所を見逃した。例えば、大手門の内側にある巨石を利用した石垣の上に建つ大手門櫓(寛永元年 1848 年建立)。大手口の石垣工事を担当したには、築城の名手として知られる加藤清正の子、忠広です。

また、千貫櫓と乾櫓は元和元年 1620、徳川幕府による大坂城再築が始まった年の建設で、大坂城に残る最古の建築物である。工事責任者は茶人として名高く、造園や建築に才能を発揮した小堀遠州が務めた。撮影場所を決めてから時間を気にせずにもう一度見学にきたい。

青屋門



極楽橋からの天守閣

